

『日本アジア研究』第8号(2011年3月)

西王母の娘たち — 「遇仙」から「陣前比武招親」へ—

大塚秀高*

西王母は古く『山海経』に異形の姿を現すが、のちには不老不死の仙薬や蟠桃の管理者として、人間界の帝王などと交会するようになる。当初の両性具有の存在から女性原理の体現者に変化したため、男女の交会により自らの不老不死の能力を更新する必要が生じたためであろう。しかし人間界に交会の相手を求めるのは困難であり差しさわりもあると意識されたのであろう、西王母の対偶神としての東王公が創出され、これと歳に一度の交会を果たすようになった。ところが道教のパンテオンのなかで、東王公が天帝、西王母が女神の最高神となるや、両者の交会は不適切と感ぜられるようになってしまった。かくてその役割は織女と牽牛という第二世代にバトンタッチされた。原西王母の継承者である織女は、道教パンテオンにおいて間もなく西王母の娘に相応しい「夫人」の地位を得たが、男性原理の体現者を人間界に求める必要がある点ではそれまでと変わらなかった。これが『新話摭粹』(や『緑窗新話』)の遇仙類に見える、「遇」や「飲」を求める仙女の正体であり、「楊家将」に代表される、数世代に互る武将一族の物語において、戦場で男将と闘い、これを実力で負かして捕虜にしたうえ強引に夫とする(陣前比武招親)、女仙に師事する女将の正体であった。いいかえれば、「陣前比武招親」する女将は西王母の第二世代であり、その師事する女仙は西王母だったのである。このモチーフを「西王母交会モチーフ」というとき、「西王母交会モチーフ」は後の才子佳人小説の中にも形を変えて使われていた。「西王母交会モチーフ」は中国の小説史において極めて重要なモチーフといえよう。

キーワード: 西王母, 遇仙, 楊家将, 陣前比武招親, 才子佳人小説, 西王母交会モチーフ

まえがき 遇仙類に見える仙女たち

『緑窗新話』は皇都風月主人の手になる、「説話人」が宋代の盛り場で聴衆に語って聞かせた「小説」のあらすじを集めた書物とされる。『緑窗新話』にはかつて複数の抄本が存在したことが知られるが、現在それらの所在はいずれも明らかでなく、劉承幹の嘉業堂に蔵されていた抄本にもとづき、1936年から翌年にかけて上海芸文社が『芸文雑誌』に分載した排印本(以下では「芸文本」とよぶ)、ならびにこれに周夷が校訂を加えた排印本で知られる。筆者はかつてこの嘉業堂抄本の抄写時期を、その芸文本に見える避諱により、南宋の孝宗以降と推定した(嘉業堂抄本自体は筆者未見、所在も不明。嘉業堂抄本が過録本である場合、この指摘は嘉業堂抄本のもとづく原抄本に対する指摘となる)

* おおつか・ひでたか、埼玉大学教養学部教授、中国文学。

¹。さらに、明の万暦以降に集中して刊行され、孫楷第によって「通俗類書」と命名された書物の一つである『繡谷春容』の巻四、巻五の下段に収められる『新話摭粹』が、『緑窗新話』に取捨選択と増補を加えたその後裔にあたる書物であること、『新話摭粹』所収の178話を対象とする分類（とその名称）がそこで新たに施された新趣向ではなく、つとに『緑窗新話』所収の154話を対象になされていたものである可能性を指摘した²。

筆者は進んで、『新話摭粹』のあわせて24の分類のうち、三つの類に共通する「遇」の意味について考察した。三つの「遇」を標榜する類とは、遇仙類、奇遇類、神遇類、奇遇類(再出)である。二つの奇遇類のうち、最初の奇遇類所収話には、いずれも直前の遇仙類所収話と同様、神女または仙女が登場している。ゆえに本来「遇」を標榜する類は四つでなく三つであって、最初の奇遇類は遇仙類と統合されるべきものとみなせる。この三類を『緑窗新話』所収話に対応させる時、その遇仙類は巻頭の16話となるのだが、それらに見える基本構造と、そこで語られる「遇」の意味を帰納して、筆者はつとに以下のように述べた³。

「小説」において語られる仙女は、自身の伴侶となるに値する男を選び、その登仙を援くべく下凡する者であった。ところが所期の目的の男の両親の妨害や男自身の拒否にあい不首尾に終わることが少なくなかった。これが仙女との遇を語る「小説」の典型的な展開であり、遇の意味であった。

筆者は、上記のごとく要約できる遇仙類所収話に見える仙女を、「遇を求める女たち」と称したのだが、遇仙類に登場する仙女にはこれと異なるタイプのももあった。それが「歓を求める女たち」と称した仙女たちである。以下に、歓を求める仙女たちの代表として、『続青瑣高議』の「賢鷄君伝」を原話⁴とするとみられる「賢鷄君遇西真仙」挙げておこう。

賢鷄君魯敢因行西城道上，遇青衣曰：君東齋有客，伺君久矣。乃歸，至庭際，見女子弄蕊花陰。君異狐怪，正色遠之。女亦徐去。月餘，飛空而來曰：奴西王母之裔，家於瑤池西真閣。恍如夢中，引君同跨彩鸞，在廣寒光碧虛中。四顧瓊林，爛若金銀世界，曰：此瑤池也。藍波碧浪，珠樓玉閣，紅光翠靄。命君升西真閣，見千萬紅粧，珠珮玎璫，霞冠霓，一人特秀。女曰：此吾西王母也。久之，紫雲娘亦至。須臾，觥籌遞舉，霞衣吏請奏鸞鳳和鳴曲。又奏雲雨慶仙期曲。酒酣，復入一洞，碧桃豔杏，香凝如霧。女顧謂君曰：他日與君雙棲於此。是夕同宿於五雲帳中。次早，君辭歸，諸仙舉樂而別。

¹ 拙論「話本と「通俗類書」—宋代小説話本へのアプローチ—」、『日本中国学会報』第28集所収、1976年10月。

² 拙論「『緑窗新話』と『新話摭粹』—万暦時代の『緑窗新話』—」、『日本中国学会報』第30集所収、1978年10月。

³ 拙論「『緑窗新話』にみる宋代小説話本の特徴—「遇」をめぐる—」、『中国古典小説研究』第7号所収、2002年3月。ただし引用にあたって〈 〉を「 」に改めた。なお、これに先立ち同内容を以下の題名により英文で発表している。「Characteristics of Sung-dynasty *Hsiao-shuo Hua-pen* as Seen in the *Lu-ch'uang Hsin-hua* : With a Focus on "Encounters"」、『ACTA ASIATICA』№82所収、2002年2月。

⁴ 宋代の類書『類説』の巻46に見える。『類説』は原文を節略して収めるタイプの類書であり、「賢鷄君伝」も『続青瑣高議』の原文そのものではないと考えられている。

すでに別稿で論じているのだが、「賢鶏君遇西真仙」と「賢鶏君伝」の間には重大な相違が存在する。「賢鶏君伝」の原文が亡佚しており、比較の対象を『類説』所収の節略本とせざるをえないため、いささかまわりくどい議論とならざるをえないのだが、その相違はおそらく個人的な知の営為の産物として生み出された「賢鶏君伝」と、語りの中で「説話人」とその聴衆の間のキャッチボールにより練り上げられた「賢鶏君遇西真仙」という、両者の誕生の経緯の相違に由来すると考えられる。「賢鶏君遇西真仙」は「説話人」が聴衆の嗜好に沿うよう原話ないしはその節略本を改変したものであり、それゆえそこから宋代の盛り場集った人々の心理を看取できるものと考え、筆者はかつてそれを以下のように述べた⁵。

(遇仙類に分類されている)「小説」は仙女の名を借りて異性と肉体交渉に積極的な女性を描き(人間の女性であれば私通ないし淫戯類に分類せざるをえなかったろう)、そうした仙女と、仙女へ自ら働きかける風流人士や、仙女からの誘いを頑なに拒む志操堅固な石部金吉との間におこる悲喜劇を語り、時としてそこに聴衆を引き付けるべく男女のからみの場面を取り込んでいたのではあるまいか。

本論では、以上に略述した考え方を踏まえ、「説話人」が好んで語った「遇」や「飲」を求める仙女たちが、中国の小説史のなかでどのように姿を変えていったかを、「小説」と同様語りの中でおそらく「説鉄騎児」として語られ、後に整理・修正をへて出版された作品を取り上げて論じようとするものである。

一 すべては西王母から始まる

「賢鶏君遇西真仙」では、賢鶏君魯敢のもとに突如現れ西王母の裔と自称した女子が(のち西真仙を名乗る)、再度現れて賢鶏君を瑤池に導き、そこで西王母と紫雲娘の姿を垣間見せて自身の出自を信頼させ、西真閣で一夜を共にしたことが語られる。ヒロインの西真仙と西王母ならびに紫雲娘の関係についてはそれ以上の説明がなく(「奴西王母之裔」、「吾西王母」の言葉だけで西王母の娘と断ずることはできまい)、西真仙が果たして自らほのめかすような存在なのか保証の限りではない。だがそれをひとまず信じ、西王母になんらかの関わりを持つらしい仙女が下界の一見平凡な男を訪い、これに積極的に肉体関係を求めると要約することは可能だろう。そこで以下ではまず西王母について簡述しておくことにしたい⁶。

西王母について述べる最古の文献に『山海経』がある。『山海経』に現われる西王母は、後世のそれと異なり、豹尾虎齒で善く嘯く、蓬髮で勝を戴く、人にして人にあらざる存在であった⁷。この段階の西王母は、神話学的には全宇宙を統合する単一神であるとみなせるといふ⁸。

⁵ 注3の拙論を参照されたい。

⁶ 西王母に関する論著はあまたあるが、本論は西王母そのものを論ずることを目的とするものではないから、以下においては、いくつかの例外を除き、論述の根拠を個別にあげることにはしない。

⁷ 『山海経・西山経』の玉山の項による。類同の記述は「海内北経」や「大荒西経」にも見える。

⁸ 小南一郎「西王母と七夕伝承」(『東方学報』第46冊、1974年)に以下の記述がある。

その後、いつの頃からか定かでないものの、西王母のイメージは、その名に相応しい相貌の不老不死の女仙と変わった。そしてこれとともに、人間界の帝王(王)との交会在事細かに描かれるようになった。この頃までに西王母本来の両性具有の属性が失われ、月が欠けては満ちることにより不死の存在であり続けたように、時に人間界の男性の代表たる帝王のもとを訪れてはこれと交會し、自らの不老不死の属性を新たにする女神と変わったのであろう。八駿の牽く馬車を造父に御させ、弱水を渡って崑崙に西王母を訪ねた周の穆王の頃は男性神の存在は必須ではなかったようだが、後の自ら積極的に人間界の帝王のもとを訪れるようになった漢の武帝の頃ともなると、西王母の全能の地位はかなりおびやかされていたものとおぼしい。周の穆王については『穆天子伝』に、漢の武帝については『漢武故事』、『漢武帝内伝』などに詳しいが、後二者の成立時期は後漢以後、おそらく六朝に下ろう。

西王母に関する資料には、以上に概略を述べた文献資料のほか、画像磚などに見える図像資料がある。西王母に関する図像からは、後漢以降そのイメージが劇的に変化したことがうかがえる。『山海経』の記載から想像される獸的相貌から、不老不死のイメージをになう図像に囲まれた女性神に変わるとともに、その対偶神として男性神東王公が出現したからである。東王公の出現も、西王母本来の両性具有の唯一絶対神の地位が失われた(ないしは失われつつある)ことを示すものであろう。後日西王母が東王公から変わった天帝のつれあいとして、女性仙人(女仙)の元締めという地位に後退する所以であった。西王母における東王公は、女媧における伏羲の場合と同様な過程をたどって誕生したと言っよかるう。

かくて天界における男女の最高神となった東王公と西王母であるが、それに先立ち若い分身を生み出していた。牽牛(牛郎)と織女がそれである。二人は七月七日の七夕に年に一度の交會を果たすとされた。二人が天帝に七夕にのみ交會を許された所以は、織女がその職責である機織を怠り、結果として朝焼け、夕焼けという天文現象に異常を生じさせたからという。朝焼け、夕焼けは宇宙の模様であるから、そこに織女が原西王母の後継者であることの一斑を見出すことは可能であろう。一方、道教のパンテオンに取り込まれた西王母は、かつての羽人を侍女に替え、自身の多くの娘たちに取り囲まれる存在へと変わった。

道教神としての西王母は、金母元君、九靈太妙龜山金母、太靈九光龜台金母などの別名で知られるが、唐・杜光庭の『墉城集仙録』によれば、二十人を越

これらの事実を基礎に次のような仮定を試みたい。西王母は、元來単独で存在し、この神の下に陰的要素(たとえば月)と陽的要素(たとえば太陽)とが統合されていた。(中略)西王母は陰的なものと陽的なものとの両性を具有することによってその全能性を表していた。玉勝は、その全能性と関係する一つの表象であったと考えられる。時代が下るにつれて原西王母の両性具有という性格が二つに分裂し、西王母が西方・月・女性などの陰的要素だけを表わすようになると、それに対応する東方・太陽などの性格を持った男性神が登場してきたのである(下略)。

西王母は、元來ただ一人、大地の中心の宇宙山(世界樹)の頂上に坐って、絶対的な権力でもってこの世界を秩序づけていたのである。その秩序づけが、彼女が機を織るという行動に象徴されていた。いわば世界の秩序を織り出していた。さればこそ機織の部分品の「勝」がその頭上に戴っているのである。

える娘がいたとされる⁹。以下にそのうちの名が明らかになっているものを挙げておく。

南極王夫人 王母第四女（名林字容真，一号紫元夫人）

雲林右英夫人 王母第十三女（名媚蘭字申林）

紫微王夫人 王母第二十女（名清娥字愈音）

太真夫人 王母之小女（名婉羅字勃遂，神仙伝作字羅敷）

『太平広記』巻 57 神仙伝

雲華夫人 王母第二十三女（瑶姬，太真王夫人之妹）

『太平広記』巻 56

上述の西真仙を西王母の娘とする記載は見あたらないものの、「賢鷄君遇西真仙」と並んで『緑窗新話』（の遇仙類）に収められている「崔生遇玉卮娘子」の玉卮娘子についてはそうした記述が存在している。まずは「崔生遇玉卮娘子」を引こう。

崔書生，不知何許人也。偶於東周邏谷口。見一女郎，姿態豔麗，願為夫婦。生因具聘娶之。兩情好合。崔母私謂生曰：新婦妖美，必為狐媚，恐傷於汝。女已潛知之，曰：妾本欲待箕帚，便望終天。尊夫人待以狐媚，是不能容。明日便行矣。翌早，辭母而去。生追至谷口，忽失所在。後有胡僧曰：君所納妻妾，乃王母第三女玉卮娘子也。若住一年，舉家必仙矣。生歎恨而已。幽怪録

この「崔生遇玉卮娘子」については、『太平広記』巻 63 に原話（出玄怪録）が収められているが、そこにも「西王母第三女玉卮娘子也」の記述が見えている。

「崔生遇玉卮娘子」に登場し崔書生に歓を求める「女郎」は、後日胡僧により西王母の第三女玉卮娘子とその素性が明かされることになっていて、この話は全体として一種の胡人採宝譚の形式をとっているのだが、それはさておく。この話でとりわけ注目されるのは、玉卮娘子と一年生活を共にしさえすれば、なんらの修行をせずとも、崔書生一家が挙って登仙できたとされている点であろう。そもそもとりたてて見所があるわけでもなさそうな崔書生のもとを西王母の第三女である玉卮娘子ともあろうものがわざわざ訪い、歓を求めるのはなぜか。崔書生が謫仙・下凡神とでもいうのなら納得がゆく。だがそうした種明かしは『玄怪録』ではなされていないのである。胡僧に玉卮娘子の素性を知らされた崔書生は歎き恨むしかなかったという。しからば、呂洞賓が白牡丹を濟度したごとく、仙女には肉体的接触（交会）を通じて下界の男を濟度する能力が備わっていたのであろうか。

二 男に挑む女たち—「陣前比武招親」

説唱詞話の『花関索伝』によれば、関羽の息子の関索は七歳のおりに迷子になって索員外に拾われたのだが、その二年後に、今度はその索員外によって義子として丘衢山斑石洞の花岳先生に身柄を預けられたとされる。関索はそこで「黄公三略」、「呂望六韜」を習い、十八般の武芸を修めた。花岳先生がいかなる人物かの記載はないが、五年前索員外に実子の「出家道童」を求めその承諾

⁹ 西王母の息子についての記載は乏しいが、『集説詮真』に引く『明一統志』には「王母之第九子名玄秀為真人」とあるという。

を得ていたとされるから、『金瓶梅』における普浄禪師のごとき存在、ただし先生と呼ばれているから和尚でなく道士であったと考えられる。

普浄のもとで出家した、西門慶の生まれ変わりの孝哥のその後について『金瓶梅』は何も語らない。おそらく平凡な和尚として、母呉月娘が夢で見たがごとき悲惨な目にあうこともなく、無事に生涯を終えたのであろう。だが花関索のごとく道士に引き取られた場合は、道教にあつては在家と出家の垣根がさして高くなかったためか、時期がくれば親元に帰ることになっていたらしい。

『金瓶梅』と時を同じくして、『封神演義』に代表される、二派に分かれた神仙が特殊なアイテムを駆使して闘うという枠組みによる物語が生まれた。『封神演義』は、元始天尊に率いられる闡教と通天教主に率いられる截教とに分かれた神仙が、それぞれ周と殷の後ろ楯となって闘うというものであるが、そこにおいては、女性がそもそも陰の存在とみなされていたためか、多くが截教側に属し、なおかつその大半が殺されることになっていた。

ひるがえって、『花関索伝』には主人公の花関索が次々と男勝りの女将（鮑三娘、王桃、王悦）と闘い、これに勝って妻にしてゆくという枠組みがあった。

鮑三娘は自分と闘って勝ったものを夫とすると「大言碑」に明記したうえで、男将からの挑戦を堂々と受けて立っていた。王桃の場合、そうした大言壮語はしなかったようだが、花関索と闘って敗れると、妹の王悦ともどもその妻になった。後日盛行した才子佳人小説では、結婚相手に自分と同等以上の詩才を持った才子を求める佳人が、自らの立会いのもと、結婚を望む男どもに詩作を競わせ、自身に相応しい才子を選び、男装してその才子の出世を援け見守るのみならず、才子に代わって自分に匹敵するいま一人の佳人まで見つけ、これを「双嬌斉獲」させることになっていた。女将が戦場で男将と武芸を競い、自分に勝ったものに嫁ぐ、あるいは自分より武芸に優れた男将を夫とするため戦場（または闘武場）で闘うという、『花関索伝』の鮑三娘や王桃、王悦に見える枠組みは、才子佳人小説に先行し、これにその基本的な枠組みを構想させたものであつて、両者は同根より生じた双子といてよい関係にあると思われる。この枠組みを「陣前比武招親」とよぶとき¹⁰、「陣前比武招親」は楊家将、呼家将、薛家将といった物語ないしこれにもとづく物語小説¹¹に多く見え、その特徴となっていた。

以下では北宋初期に実在した楊業（楊継業）とその子孫を主人公とする二つの小説、『北宋志伝』と『楊家府演義』をあわせ便宜的に小説「楊家将」とよび、鼓詞の「楊家将」と区別するのだが、小説「楊家将」に見える「陣前比武招親」の枠組みは、松浦智子によれば¹²前者に4例、後者に6例見え、うち1例は金頭娘と呼延賛という呼家将に関するものであつて、楊家将に関するものは残る6例（3例は共通）という。以下にそれを示しておく（数字は『楊家府演義』の回数）。

¹⁰ 松浦智子『『楊家将演義』における比武招親について』（『中国文学研究』第31号所収、2005年12月）は、この枠組みを「比武招親」とよぶが、筆者はこれに「陣前」の二字を付け「陣前比武招親」とよぶことにしたい。

¹¹ 物語ならびに物語小説については、拙論「剣神の物語（下）」（『埼玉大学紀要教養学部』第32巻第2号所収、1997年3月）の「小結」を参照されたい。

¹² 注10の松浦論文による。

- (28) 穆桂英－楊宗保
- (30) 黃瓊女－楊六郎
- (37) 重陽女－楊六郎
- (46) 寶錦姑－楊文広
- (47) 杜月英－楊文広
- (48) 鮑飛雲－楊文広

松浦は、花関索と鮑三娘との「陣前比武招親」が『楊家府演義』の楊文広と鮑飛雲のそれに設定が類似していることを指摘したのち、金文京がすでに指摘している¹³、実在の人物李全と楊妙真に関する『齊東野語』の記述と花関索・鮑三娘の結婚譚の類似に言及し、楊妙真と楊家将の物語が芸能の俎上で接近、融合していた可能性、小説「楊家将」における「陣前比武招親」の話柄が元初頃から李全・楊妙真の物語の影響下に形成されていた可能性に言及するのだが、今そのことはおく。筆者としては、一騎打ちでも男将に勝るだけの武芸を女将に仕込み、予め特殊アイテムを授け、なおかつやがて戦場でめぐり合う男将を運命の人と示唆してまで「陣前比武招親」させた、女将の師である仙女あるいは道姑の存在に注目してみたいのである。

穆桂英は上記六人の女将のなかでは知名度が抜群であるが、そんな穆桂英の師であっても小説「楊家将」での言及はなきに等しく、『楊家府演義』で「生有勇力、曾遇神女伝授神箭飛刀、百發百中」とされるにすぎない。黄瓊女以下の武芸の由来とその師となると、特段の記述はないといってよい。小説「楊家将」にはそうした点に関心がなかったといってよかろう。ところが、当初文字の読めない聴衆を対象に語られていた（ものが、後に文字化された）鼓詞「楊家将」ともなると、様相が少しく変わってくる。そこで、女将とその師について語るに先立ち、ひとまず鼓詞「楊家将」の全般について紹介することにした。

三 鼓詞「楊家将」その一—下凡神楊七郎

以下では北宋初期に実在した楊業（楊継業）とその子孫を主人公とする鼓詞のすべてを便宜的に鼓詞「楊家将」とよぶことにするが、筆者が読了したものは、以下の8種にすぎない（書名は本文題による）¹⁴。

- 新刻繡像楊家将 四卷二十四回
- 繡像天門陣 四卷三十九回
- 繡像二打天門陣 四卷二十回
- 三打天門陣 四卷三十二回
- 四打天門陣 四卷二十八回
- 五打天門陣 四卷二十八回

¹³ 『花関索伝の研究』（汲古書院、1989年1月）の金文京による「解説篇」による。

¹⁴ いずれも『故宮珍本叢刊』（故宮博物院編、海南出版社、2000年6月）の第714冊から第717冊にかけ、「清代南府与昇平署劇本与档案」の「鼓詞」として収められている。書名を「新刻」とするものもあるがすべて抄本。「絵図」や「繡像」も附されていない。『繡像天門陣』の大尾に「衆明公若是待買下冊看 高蜜県南関去找徳盛堂」とあるから、市販の繡像本をわざわざ抄写して皇帝の御覧に供したものかもしれない。

絵図十二寡婦征西 四卷三十二回

絵図楊文広征南 四卷二十四回

もちろんこれが鼓詞「楊家将」のすべてというわけではない。『新刻繡像楊家将』に先立って、楊継業さらには継業の父楊滾の活躍を語る作品があったと思われる。『新刻繡像楊家将』冒頭の次の文がそれを物語っている。

上一回書說的，是匡胤趙太祖憑日坐着一匹馬，掌中一條棍，創蕩天下，把基業成立，繼柴王世宗登龍位，位列九五，治成天下一統。又幸有火(太)山王楊滾，於老王匡胤私將銅鎗換了玉帶，他可才棄暗投明，扶保宋室天下。太山王歸宋室後得病身亡，其子繼業克成父志，憑日坐下一匹馬，掌中一口刀，同夫人余氏帶領八家強兇，南爭北戰，東擋西追，掙就的大功七十二件，小功不可勝數。天子見喜，就勅封楊老爺為令公之職，余氏夫人有太君之号，八家少爺封為畏山八虎，他父子那個英名，真正是鎮乾坤耀宇宙，一言難盡。

ひるがえって、楊継業の息子は『新刻繡像楊家将』では八人で、順に太(彦平)、真、高、貴、春、景、希(彦四、黒虎星)、順とされる。これは、「宋人記載及宋史」に見える楊家将の世系はもとより、明人小説や元明雜劇に見えるそれとも異なる¹⁵。

娘を太宗の正宮とし、国老として太師の地位にある潘皇字仁美は、宋室を乗っ取ろうと考え、南唐に不穏な動きありと偽りの奏上をする。そのねらいは討伐軍の大將に三男潘豹をあて、軍権を掌握させることにあった。このため、天齊廟に擂台を設け、潘豹に三日間武芸者の挑戦を受けさせる。潘豹の武芸の腕を認めさせ大將の地位につけさせるためであり、万が一にも対戦を名乗り出る者がいたら、腕の立つ取り巻きがそれを片付けることになっていた。楊継業はめんどろな事態が起こることを恐れ、息子たちに外出を禁ずる。だが兄弟の懇請にまけた継業の妻余太君が最終三日目に息子たちに外出を許し、上方黒殺星が臨凡した七郎が潘豹を半裂にするという大事件を起こしてしまう。かくて宮中をも巻き込んだ楊、潘両家の争いが起こってしまう。最後は南清宮八千歳の調停で「帯罪南征，掃除苗蛮平安王，将功折罪」となるのだが、潘家の遺恨が消えるはずもなく、この事件が後日「楊七郎乱箭射死歸了陰」となるきっかけとなったと語り、「這都是後來之事且不論，下回書南唐大戰方良臣」として全篇を終える。上記の鼓詞「楊家将」8種には「下回」にあたる南唐征伐や楊継業ならびに楊七郎の死を語る作品は見あたらないから、これらの部分を語る鼓詞「楊家将」は南府や昇平署には残されていなかったのであろう。

ひるがえって、『新刻繡像楊家将』のいう「楊七郎乱箭射死歸了陰」であるが、『楊家府演義』では、楊七郎が危機に陥った父継業の救出を潘仁美に求めるが、酒に酔わされて樹上に縛り上げられ、七十二本の矢で射殺されるとなっている。この場面、『北宋演義』では、兵士の射掛ける矢があたらないのを見た七郎が、自分の目を覆い隠すよう申し出、従容として乱箭に死ぬとなっている。いずれにせよ小説「楊家将」に七郎がなにゆえかくも残酷に殺されねばならなかったのかに対する説明はなかった。小説「楊家将」にも鼓詞「楊家将」の『新刻繡像楊家将』にあたる部分があったのだが、現存する二種の小説「楊家将」では省かれたのであろうか。

¹⁵ 蔡向升・杜雪梅主編『楊家将研究 歴史卷』（人民出版社、2007年2月）の附録に見える。

楊、潘両家の反目は、そもそも子飼いの武将と降将との間にありがちな反目として語られてしかるべきものだったはずである。ところが鼓詞「楊家将」はそうした語り方をせず、あえて楊七郎の潘豹半裂き事件をきっかけとする両家の遺恨としてこれを語っていた。しからば、鼓詞「楊家将」もおそらくそうであったであろう『楊家府演義』の楊七郎の死に様はより民衆的で物語小説的な語りのあり方を示し、玉帝の詔を聞き頓悟した関羽や処刑役人に自身の手足の筋を断つよう指示して車裂きにされた李存孝に通ずる『北宋演義』の楊七郎の死に様は、それを修正した知識人による原小説的¹⁶な語りのあり方を示しているとはいえないか。この場合、楊七郎の死の場面などに象徴される、鼓詞「楊家将」に目立つ物語的な枠組みが、小説「楊家将」以前に存在していたにもかかわらずそこに採用されなかったものなのか、小説「楊家将」以後に、民間文学特有の範型により新たに生み出されたものなのかが、中国小説史的には問題となってくる。

楊七郎を主人公とする鼓詞「楊家将」の前半は、明らかに小説「楊家将」と異なっており、両者は二卵性双生児の関係にあるといえる。鼓詞「楊家将」には、『新刻繡像楊家将』（『楊七郎打播』）と題される鼓詞はおそらくこれと同内容であろう）に続くものとして、小説「楊家将」では前半のクライマックスとなっている、幽州における楊一家の悲劇を語る『八虎闖幽州鼓詞』がおかれているのだが、両者の間に、『楊七郎三下南唐』が語られていたとみられる¹⁷。『楊七郎三下南唐』は筆者未見であるが、幸い、江蘇省の南通などで現在も演ぜられている童子戯の劇本を二十世紀の始めに石印出版した通称「石印鼓詞」¹⁸に、同内容扱ったと思われる『下南唐(楊七郎三下南唐)』があり、その内容をうかがい知ることが出来る¹⁹。『八虎闖幽州鼓詞』も未見であるが、仮に「石印鼓詞」の『八虎闖幽州』と同様とすれば、楊七郎や楊継業の死はもとより、楊六郎の三関守備や孟良の盗馬まで語っていたとみなせる²⁰。下凡神楊七郎は

¹⁶ 関羽ならびに李存孝の死に様、原小説については、拙論「劍神の物語(上)」(『埼玉大学紀要教養学部』第32巻第1号所収、1996年9月)及び注11の拙論を参照されたい。

¹⁷ 以下の鼓詞の名称はすべて『中国鼓詞総目』(李豫他編著、山西古籍出版社、2006年4月)による。なお安順の地戲譜に『三下河東』があり、提綱に「只因張旦去催宝、張同不服下反表、惹動宋朝楊家将、三下去把河東掃」とあるが、文化大革命終了後に油印出版されたものであるためここでは論じない。

¹⁸ 通称「石印鼓詞」については、拙論「中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館所蔵の「石印鼓詞」について—「石印鼓詞」と「童子戯」—」(『饗登』第8号所収、2000年9月)を参照されたい。

¹⁹ 「石印鼓詞」『下南唐(楊七郎三下南唐)』の上海椿蔭書莊本の提綱は以下のようになっている。

于道人三次興兵 楊七郎金殿举鼎 柴素貞綵楼招親 潘相府大郎被害
詳しくは、拙論「石印鼓詞研究」(其一、其二、其三)(『埼玉大学紀要教養学部』第35巻第1号・第35巻第2号・第36巻第1号所収、1999年9月・2000年3月・9月)を参照されたい。

²⁰ 「石印鼓詞」『八虎闖幽州』の上海椿蔭書莊本の提綱は以下のようになっている。

宋太宗五台山還願 韓延寿發兵困幽州 八賢王天波府頒兵 楊家将八虎闖幽州
潘仁美射殺楊七舍 老令公撞死李陵碑 楊六郎金殿告御状 潘仁美口外去充軍
楊六郎奉旨守三関 孟將軍搬屍盜宝馬

かくて天に帰り、鼓詞「楊家将」は一つの区切りを迎えたはずである。

四 鼓詞「楊家将」その二—穆桂英から十二寡婦へ

『八虎闖幽州鼓詞』に続く鼓詞「楊家将」は、奸臣の罠にはまり、皇帝の命なしに辺関を離れたとして斬罪に問われた六郎が、国家存亡の危機に一時身を隠していた白虎村の地窖を出て真宗を救うという作品だったはずであるが²¹、その名称は詳らかではない。かくていよいよ穆桂英の登場する、天門陣をめぐる宋・遼両国の争いの段となるのだが、それが一度で終わる小説「楊家将」と異なり、鼓詞「楊家将」では延々二十度にも互って繰り返されることになっていた²²。しかも両国の争いはまもなく後景に退き、『封神演義』がそうであったような、神仙の両派の遺恨試合の様相を呈し始める。鼓詞「楊家将」の『繡像二打天門陣』以降は、小説「楊家将」の成立以後に、二匹目、三匹目の泥鰌を狙って続々創作されたものの可能性が高いが、聴衆の好みに迎合し果てしなく繰り返される楊家将物語の天門陣をめぐる闘ぎ合いを、小説「楊家将」が簡潔に整理した可能性もなくはない。穆桂英は六郎の子楊宗保を「陣前比武招親」して楊家の一員となるのだが、彼女については後述することとして、以下ではそれ以降の鼓詞「楊家将」につき簡単に述べておくことにしたい。

確証はないのだが、「石印鼓詞」から推し、鼓詞「楊家将」にも天門陣をめぐる争い以降に「石印鼓詞」の『小祭祖(金槍伝、両狼山)』と『大祭祖(楊排風掃北)』にあたるものがあつたと推定される。前者は楊宗保を、後者は楊排風を主人公とし、ともに遼国内にある楊令公継業の墓を詣でることに端を発する物語²³を語っていたと思われる。薛仁貴の孫に当たる薛剛が、反逆者の一族

²¹ 既述の鼓詞『繡像天門陣』の冒頭に以下のような記述がある。

自太宗宴(晏)駕以後、真宗皇帝在位、朝中出了個奸臣王強、明保南朝、暗通北国、勾惹的干戈日起、狼烟不息。楊延昭率領辺関二十四将、把北国君臣殺的亡魂喪胆。王強心恨楊景、偶然心生一計、遂修假書一封、說：南清宫八千歳身得大病、命他刻日進京議事。六爺見了書詞、不允真假、私離辺関。王強探聽的實、金殿奏了一本、說：他不聽宣召、私離辺関、必有謀反大逆之心。真宗聽信讒言、一怒要將六爺斬首、多虧了八千歳与寇萊公苦苦保奏、死罪饒過、活罪難免、發配汝州充軍。王強恐有後患、又奏六爺在汝州私藏甲兵、要奪真宗山河。真宗着忙即差保駕大將軍胡丕頭到汝州去取六爺首級來獻。胡老爺到了汝州、見了知府張濟、二人設計、將監中囚犯明六爺面目相似者斬訖、赴京交旨。六爺在白虎村地窖以內寧首減形。奸賊王強知六爺已死、朝無能將、以通信於北国楊慶、同台府天降祥瑞、出了奇景、池水變成佳酒、樹葉俱作美漿。真宗聞知此信、即欲率領文武、前去觀望同台府的奇景。八千歳与寇萊公苦諫不從、折日率領文武大臣合朝三軍、一直到了同台府觀望奇景。不料王強奸計一生、早已將此信送入北国。蕭后差蕭天左・王金秀等代領番將三十六員、大兵一十五万、將同台团团圍住。真宗遣將迎敵、屢戰屢敗、只困的內無糧草、外無救兵。多虧了胡丕頭露了真情、即時奏於真宗、降了勅旨三下汝州、從地窖以內把六爺找出、那馬在陳家庄、又收了焦贊、泗州堂見了劉超・張蓋、太行山取了孟良、入勝滕山寨、陳林・柴干闢六爺未死、亦引兵而來、一齊披掛正肅、把番兵殺的尸橫遍野、血流成河、大敗而回。真宗大悅、遂封六爺為三関都總討、外賜龍泉寶劍一口、先斬後奏、自此六爺招軍買馬、以備伐遼之計。蕭后聞此消息、只愁的寢食不安、乾昌勸蕭后張招賢榜、求取奇人、一為長保之計、二為報仇之事。

²² 注 17 の『中国鼓詞總目』による。

²³ 「石印鼓詞」『小祭祖(金槍伝、両狼山)』の上海椿蔭書莊本の提綱は以下のような

として処刑され、溶けた鉄を注いで固めた鉄墳に埋葬された両親を、敵の警護をもつともせず、申うという、小説『異説反唐演義全伝』や『反唐鼓詞全伝』に見える、物語の世界ではおなじみの枠組みによったものであった。

鼓詞「楊家将」は、こののち楊家の第四世代楊文広と小説「楊家将」には登場しないその妹金花²⁴を主人公として語られてゆく。『楊文広征西鼓詞』、『楊金花争帥印鼓詞』、『絵図楊文広征南』などがそれである²⁵。同じ題材を扱った小説に『五虎平西前伝(五虎平西珍珠旗演義狄青全伝)』と『五虎平南後伝』があるが、ともに狄青を主人公とするもので、後者の後半に楊文広や十二寡婦が登場するが、前者には楊家の男女の将軍は一人として登場していない。これに対し、上記三種の鼓詞「楊家将」にあつては、楊文広、金花の兄妹が縦横無尽の活躍をしており、娘を貴妃とする狄青は潘仁美顔負けの悪役に成り下がっている。したがって、いずれも狄青が登場する小説と鼓詞ではあるが、両者は似て非なるものといつてよい。ちなみに、『楊金花争帥印鼓詞』においても、暗愚な主君の危機を、そうした事態がいずれ出来するであろうことを予見した賢明な輔弼者によりあの世の象徴たる地穴に匿われ満を持していた英雄が救うという、楊六郎でも語られていた枠組みが、楊文広を主人公として再度語られていた²⁶。また、時代を仁宗朝としているにもかかわらず、『絵図楊文広征南』が征南の目的地をしばしば南唐としていることも気になる。既述の、楊七郎などによる南唐征伐と同一の範型になる作品とみてまず間違いのないのではあるまいか。

小説「楊家将」にあつても鼓詞「楊家将」にあつても、後半のクライマックスは十二寡婦征西の物語である。この部分、『楊家府演義』では、時代を神宗朝(1068-1085)、主人公を楊継業から数えて四代目の楊文広とその子懐玉とするが、文広はすでに六十の坂を越しているとされる。太宗の在位(976-997)からおよそ百年が経過していることを考えれば、妥当な年齢設定といつてよい。小説であれ鼓詞であれ、楊家の男将の年齢設定はおおむね妥当である。ところが女将となると信じがたい年齢設定がなされている。たとえば鼓詞の『絵図十二寡婦征西』では、楊文広の曾祖母にあたる余太君がいまだに存命で、楊文広が征南で危機に陥るや、神宗の勅旨を奉じ、「老的有百歳開外、少的也有六七

っている。

老令公頭靈託夢 偷祭祖楊宗保盜令 韓翠屏用法擒五将 余太君請旨發兵

両狼山楊家被困 楊矮子變猫戲翠屏 殺番兵救出五兄弟 両狼山楊家祭祖

『大祭祖(楊排風掃北)』には上海文益書局本と上海閘北協成書局本があるが、いずれにも提綱がない。なお楊排風は鼓詞『四打天門陣』に登場する張排風と同一人で、もと楊家の侍女であったが、のちに楊家の娘分となり楊排風を名乗った。

²⁴ 金花に替わり、『楊家府演義』には文広の姐の宣娘が登場する。

²⁵ 安順地戯の劇本に『五虎平西前』、『五虎平西後』、『五虎平南』と題するものがあるが、これらについても注17に挙げたと同じ理由によりここでは取り上げない。

²⁶ 上記の『絵図楊文広征南』の第1回には「緊接上部奪印」、「仁宗皇爺在位、天下荒荒不安、賊寇四起。狄青掛了帥印、在教軍場比武、楊金花私自奪印、犯了滅門之罪、綁赴法場問斬。多虧蘆花王保本、地穴内放出楊文広、領定合府男兵女将、大鬧汴梁城。俱在上部書説於明白、按下不提」、「上部書説的明白張排風掛了先鋒印」などとあるから、『楊金花争帥印鼓詞』においては、教軍場における比武で勝利を収めた楊金花が大將、張排風が先鋒となって征南したと思われる。

十歳」の楊家の十二寡婦に下命し、打ち揃って出陣させている。余太君の嫁の世代が「百歳開外」である以上、ご本人の年齢はこれをなほどこか上回るはずである。しかもこの十二寡婦がそろって大活躍し、楊文広を援けて征南の目的を果たさせるのである。余太君は、そうした化け物のような女性戦士群のうえに君臨する、大家族を統合する不老不死の女性として鼓詞「楊家将」では形象されているのである²⁷。

五 女仙とその男勝りの女弟子たち

ひるがえって、楊家の十二寡婦であるが、なかには公主もいるが、「陣前比武招親」し、強引に夫人となった積極的な女性も少なくなかった。「陣前比武招親」の対象を楊家に限らず美丈夫の男将にまで広げるなら、そうした男勝りの女将はさらに増えよう。かくのごとき女将の武芸の師匠たりうるのは、神仙にも男女の別がある以上、当初においては女仙ないし道姑をおいて他になかったはずである。鼓詞の『繡像天門陣』が穆桂英を「金刀聖母門下生」（第15回）で玉帝の勅旨により下方に降生した「上方九女星」（第16回）とし、韋陀（馱）の後世身とされる宋軍の岳安を『三打天門陣』の第2回で「陣前比武招親」する弥勒国の玉蟬公主を穆桂英と同門の「金刀聖母徒弟」とする所以であった。この岳安、『繡像二打天門陣』の第2回では青蓮山宝色洞の準提菩薩の徒弟で龍女の重転生とされる黄鳳仙にも「陣前比武招親」されており、「斉獲」ではなかったが「双嬌」を得ていた。だが「陣前比武招親」され「双嬌」を得る艶福家は岳安一人に限らなかった。

『楊家府演義』の楊文広は、順に寶錦姑、杜月英、鮑飛雲に「陣前比武招親」される。鼓詞の『絵図楊文広征南』では寶錦姑以前に呉金定、劉香春に「陣前比武招親」されている（杜月英、鮑飛雲については当該部分が伝わっておらず、存否不詳）。『絵図楊文広征南』によれば、呉金定と劉香春はともに白蓮聖母の門人とされ（巻2第3回）、寶錦姑は九功山玄妙洞九祥道姑の弟子とされている（巻4第1回）。

詳しく例を挙げて論ずることはしないが、楊家の男将に代表される美丈夫を「陣前比武招親」する女将は、さまざまな経緯によって幼少時に親元を離れ、女仙や道姑のもとで武芸を修め、成人後、庇護者の女仙や道姑から自身の運命に関する啓示を得て下山し、親の反対を押し切り、時には親兄弟を殺してまで「陣前比武招親」をする、特殊アイテム（呪物）を譲り受けることによりかつて

²⁷ 『楊家府演義』はさすがに余太君に言及せず、木（穆）夫人（穆桂英）も死んでいるとする。『楊家府演義』は十二寡婦の征西に引き続き、文広の息子懐玉が一族を引き連れ太行山に退隠することを語って全篇を締めくくっているのだが、鼓詞「楊家将」は、『絵図十二寡婦征西』末尾の下記の記載によれば、文広の征西後は『五虎平南後伝』に相当する「狄青往南首部」に続いていたようである。

要知端的、下部書劉晋王女友書包丞相保举良将、狄東美奉命出師、楊文広、王懷女、劉飛虎一班好漢領兵大破云夢関、収伏九溪十八洞、俱在狄青往南首部便自明白。

ちなみに、「石印鼓詞『十二寡婦征西』の上海椿蔭書莊本の提綱は以下のようになっていて、主人公を楊文広ならぬ楊宗保としていた。

征西夏楊宗保被困 闖番營劉青討救兵 天波府衆寡婦挂帥 平定四国奏凱回朝

の庇護者である女仙や道姑の神通力の一部を受け継ぐ存在であった。この意味で、「陣前比武招親」する女将は、死ぬべき存在である美丈夫の男将が次々と代替わりしてゆくのと好対照をなす、老と死とを超越した存在であった。

楊家の男将に代表される美丈夫を「陣前比武招親」する女将は、宋代の盛り場で語られていた「小説」の遇仙類のシナリオに見え、死すべき存在である男に「遇」と「歓」を求める仙女たちに通ずる存在であった。両者の違いは、「遇」や「歓」を求める仙女たちが男の拒否により目的を果たすことが出来ず、おとなしく身を引いたのに対し、男勝りの女将たちは拒否をもものともせず、あくまで所期の目的に向かって邁進し、その目的を達成した点にあった。『楊家府演義』の大尾は文広の息子懐玉が一族の（不死の）女性たちを引き連れ太行山退隠することで終わっているのだが、この結末は、蕭湘迷津渡者の『都是幻』に見え、『紅樓夢』の先駆けとなった、不死の仙女らに囲まれて昇仙する趣向に通ずるものといえよう²⁸。

ひるがえって、「陣前比武招親」する女将は、自身が不老不死の存在であり続けるため、男性原理の体現者との交会の相手を人間界に求めざるを得ない、西王母の娘世代の、「遇」や「歓」を求める女仙や織女が、より人間化したものではなかったか。さすれば、そうした女将の師にあたる女仙は西王母にあたろう。また「陣前比武招親」して楊家に嫁いだ女将の最初の一人であって、後には楊家のゴッドマザーとなった余太君も西王母だったに相違ない。小説にせよ鼓詞にせよ、「楊家将」に代表される数世代に亙る武将一族の物語が欠かさず征西の物語とその道中における「陣前比武招親」を語るのも、それらが『穆天子伝』の伝統を汲んだ、崑崙を目指す作品だったからに相違あるまい。

²⁸ 蕭湘迷津渡者と『都是幻』については、拙論「蕭湘迷津渡者とその作品」（『埼玉大学紀要教養学部』第24巻所収、1989年3月）を参照されたい。

西王母的女儿—从“遇仙”到“前比武招”

大塚秀高

西王母最早在《山海经》中以异形姿态出现，后来从不老不死之药和蟠桃的管理者的身份，跟人间帝王交会。或许由于她已从当初的同时具有两性的存在变为女性原理的体现者，因此为更新她的不老不死的能力，需要男女的交会。然而，在人间找到合适的交会对象并非易事，也许正是因为意识到了这一点，因此创造出了西王母之对偶神东王公并使其每年一次与之交会。不过道教教团逐渐使其神灵阶层化，以东王公做为天帝，西王母做为最高位的女神，这样一来两位最高神的交会便让人觉到不太妥当，于是这项职责便递交第二世代的织女和牵牛身上。继承原西王母职责的织女，不久便获得了适于西王母女儿身份的“夫人”称号，但该做的在人间找寻男性原理体现者并与之交会的这责不变。这就是在《新话摭粹》（和《绿窗新话》）中的遇仙类故事中所见到的寻求“遇”或者“歡”的仙女的真面目，也就是以“杨家将”为代表的，世世代代全力以赴，毫不辞劳地侍奉帝王的武将一族的物语里，“阵前比武招亲”的女将的真面目。换句话说，“阵前比武招亲”的女将就是西王母的第二世代，她所师事的女仙就是西王母。如若以此母题命名〈西王母交会母题〉，那么在后来才子佳人小说中便会发现许多都是此母题的变形。因此可以说，它在中国小说史上是极其重要的母题。

关键词：西王母、遇仙、杨家将、阵前比武招亲、才子佳人小说、西王母交会母题